



文化・経済フォーラム滋賀

提 言

第 12 回総会資料

(令和 4 年 (2022 年) 2 月 12 日 (土))

創造の現場に若い世代の活躍の場をつくり、地域の原動力に

新型コロナウイルスが ICT の普及を進めている

新型コロナウイルスの影響で、私たちの生活は一変した。公的機関や企業ではウェブ会議やテレワークの導入、教育現場ではオンライン授業やタブレット端末の整備が行われ、2021年は ICT 元年と言われた。ICT（情報伝達技術）への理解と普及が進み、人をつなぐ交流手段も新しい局面を迎えようとしている。中でも、現在、開発競争が進むインターネット上の仮想空間（メタバース）は、テレビが登場して演劇や映画が家庭で楽しめるようになったときを超えるインパクトがあるという。視聴覚だけに頼らず身体性を伴って双方向にアクセスできるからである。

パソコンの中の仮想世界では、いつでも、誰でも、芸術鑑賞や文化活動に参加したり、文化遺産・史跡巡りをしたりなどの観光ができる。技術の向上で、文化芸術の分野でも鑑賞や参加する手段が広がると、これまで身体的、経済的、時間的理由でアクセスが困難だった人たちも参加しやすくなる。さらに、移動や集客に伴うコストも減って脱炭素といった SDGs も意識することができるのである。

若い世代は ICT 環境に創造的に適応する

今後 ICT の進展で、若い世代を中心に生の文化芸術に接しない傾向はより一般的になるかもしれない。滋賀県が令和 2 年度に行った調査でも、高齢者は文化施設等での直接鑑賞や公民館等の人が集まる場所での活動機会が多いのに対し、若者は電子機器による鑑賞や通勤・通学中の鑑賞機会が多いという。そして、人が集まることで潤っていた地域や産業への効果を考えると、今後は文化芸術を地域で活かしていくシナリオも変わっていくであろう。

しかし、こうした局面だからこそ ICT 環境を創造的に駆使する力が必要となる。昨今の SNS 上で若者の手によって新しい文化が生まれているように、いつの時代でも若い世代は与えられた環境に適応しながら、そうした適応すべき環境自体を自分の中で再構築するという優れた力を見せているのである。

領域を超えた関係づくりが文化芸術の存在価値を高める

コロナ禍で一気にデジタル化が進んだように、環境変化のスピードそのものは以前に増して速くなっている。急速な環境変化の中、引き続き文化芸術の力を社会で活かしていくには、文化芸術以外の領域との情報共有など関係づくりに目を向け、文化芸術の存在価値をより高めていくことが大事である。

これからは、遠隔で滋賀の芸術や文化財を鑑賞したり参加したりすることを楽しみにされる方もあるだろう。昨年 12 月にローム(株)の竹内善行氏を講師に招いた文化経済サロンでは、よいものを作ってほしいと音響機器の開発エンジニアと音楽家が交流する話を伺った。ICT の普及に伴い、これまであまり関係がなかった分野との交流も進めていきたい。また、2025 年に滋賀県で国民スポーツ大会・障害者スポーツ大会、国際博覧会（大阪・関西万博）が予定されている。その後に国民文化祭も開催されるだろう。こうした県域で取り組むイベントは、産業、科学技術、教育、福祉など様々な領域の人たちが滋賀の文化資源を通して会話するチャンスである。領域を超えて連携することで、滋賀の文化資源を使って新しい価値を生み出

すことに挑戦できる。特に ICT 環境下で育ち、インターネットのようにネットワーク同士の横のつながりで情報を共有したり連携したりするつながり方に慣れた若い世代には、領域を超えてつながることは難しくないだろう。したがって、こうした場面で積極的に彼らの活躍の場を開いていくべきである。

文化芸術が創造的な地域をつくる～ガチャ・コン音楽祭～

これまで文化・経済フォーラム滋賀では、アートの可能性を地域に取り入れることで若い世代にも魅力ある地域づくりを進め、地域に新たな活力を生み出すことを提言してきた。令和 3 年度は、提言を踏まえて（公財）びわ湖芸術文化財団地域創造部と共催で、アートと地域の出会いや交流の場を目的とするアートプロジェクト「びわ湖・アーツ・みんぐる 2021『ガチャ・コン音楽祭』」（以下「音楽祭」）を、近江鉄道（株）の協力で実施。近江鉄道沿線でフィールドワークを行い、どんな旅をしたか、どんな出会いがあったか、地域の魅力を音楽で表現した。重要だったのは、生音を現地で演奏すること。駅ホームのさまざまなことが無秩序に入ってくる環境でその場所、その時ならではの演奏を届けた。参加者からは、終わった後もその時の空気感や景色が記憶に残ったと感想があり、思い返すとその空気感や景色は、昨年 2 月の第 11 回総会で講演いただいた養老孟司氏が指摘された、デジタルデータで情報化されない生の芸術が伝えるものではないかと考える。

創造の現場での出会いが若い世代を育てる

ガチャ・コン音楽祭ディレクター野村誠氏の、「イベントはいつか終わるけれども、準備の段階で人と出会い生まれた関係性はなくなる」という言葉に教わるものがある。仮想の世界と違い、現実の世界では非日常である芸術を地域に持ち出そうとすると、たくさんの人にお世話になる場面が出てくる。昨年 10 月に実施した第 14 回文化ビジネス塾で、音楽祭を振り返り議論を行った。その際に、登壇者の原久子氏が指摘した「関わった人たちの中にあつた何かモヤモヤしたものが引き出される。そんなことがいくつかの場所で起こり始め、つながっていく」という現象は、文化芸術の現場で起こすことができるのである。

音楽祭では、並行して取り組んだ地域コーディネーター養成講座の若い受講者たちが、ガイドパンフレットの制作や観客誘導等の当日運営を担った。そこから新しいネットワークが生まれていくことを期待している。ぜひとも、こうした現場に若い世代が参加し、人のつながりや引き出された地域の魅力を受け継ぎ、新しい価値を創造する原動力となっていきたい。そのためにも、社会全体で若い世代が文化芸術の現場に参加する役割を理解し、参加しやすい仕組みを構築すべきである。

そして創作の現場そのものも、ICT の進展など人をつなぐコミュニケーションの環境変化に呼応して創造的に適応した企画や運営が求められてくる。これからの劇場・美術館をはじめ文化芸術のイベントや催しの主催者は、その企画や運営に若い世代の長所や能力を活かすかたちで彼らをもっと参画させ、育てていく場面を作っていくべきだろう。

以上のように、ICT の進展による文化芸術へのメリットを有意に活かせるよう、領域を超えて連携し、若い世代の活躍の場を広げる。そして、現場で生の文化芸術が伝える良さを若い世代に継承し、地域の魅力を発信していくこと、それが豊かな社会につながっていくのである。

■提言とりまとめ経過

滋賀アートプラットフォーム事業の開催

人々が芸術文化を通してつながることで、新たな文化や地域の産業が育まれるという提言に基づき、近江鉄道株式会社の協力を得て鉄道とその沿線を会場に、「びわ湖・アーティスト・みんぐる 2021『ガチャ・コン音楽祭』」を開催した。“みんぐる”とは交じり合うという意味で、知と感性を刺激し合うようなアートと地域の人々との出会いや交流の場を作ることを狙いとする。

○「びわ湖・アーティスト・みんぐる 2021『ガチャ・コン音楽祭』」の開催

ディレクターに芸術と社会の関係に新領域を切り拓いてきた作曲家の野村誠氏を迎え、企画・実施した。

(1) 車内放送歌合戦

近江鉄道900形の車内でオリジナルの駅名ソングを放送した。

期 間：10月1日（金）～10月31日（日）

放送駅：全33駅中26駅で実施

参加アーティスト：岡田健太郎氏（シンガーソングライター）、竹澤悦子氏（地歌箏曲家）、鶴見幸代氏（作曲家）、日野少年少女合唱団、Hugh Nankivell氏（作曲家）

(2) ツアーライブ『無人駅の音楽会』

近江鉄道の4か所の無人駅を会場に、電車を使ったツアー型ライブ演奏を実施した。

日 時：10月17日（日）13:00～16:00

会 場：近江鉄道「朝日大塚駅」「桜川駅」「水口石橋駅」「水口城南駅」

出 演：野村誠（作曲家）、宮本妥子（打楽器奏者）、水口ばやし八妙会

(3) クロージングライブ

『ガチャ・コン音楽祭』の屋外ライブを振り返る演奏会を開催した。

日 時：10月31日（日）13:30～14:20

会 場：滋賀県立文化産業交流会館 小劇場（米原市）

出 演：井伊亮子（フルート）、野村誠（ピアノ）、宮本妥子（マリンバ）、日撫神社角力踊り保存会（米原市）

文化ビジネス塾（第14回）

「びわ湖・アーティスト・みんぐる『ガチャ・コン音楽祭』」をライブ演奏と記録映像で振り返り、協力企業の近江鉄道株式会社、アートプロジェクトの研究者らとアートを通じた地域の魅力や人との出会いについて議論した。

日 時：10月31日（日）14:50～16:00

会 場：滋賀県立文化産業交流会館 小劇場（米原市）

テーマ：「地域・アート・鉄道 ～何を残し何を始め何をやめるか？」

登壇者：野村誠（作曲家、「ガチャ・コン音楽祭」ディレクター）、原久子（アートマネージャー、大阪電機通信大学教授）、山田和昭（近江鉄道株式会社構造改革推進部部長）

進 行：谷祐一郎（滋賀県県東北部地域公共交通支援室）

共 催：滋賀県立文化産業交流会館（令和3年度ビジネスカフェ in 文化産業交流会館）
公益財団法人滋賀県産業支援プラザ

文化経済サロン

新・琵琶湖文化館の再建計画が具体化されるなか、近江の仏像に関する展覧会の企画や調査研究の第一人者で、当フォーラム幹事でもある高梨純次氏に、近江の仏像の特徴と、今後の課題についてお話を伺った。また、創業者の佐藤研一郎氏（1931～2020年）の遺志を継ぎ、音楽文化の

普及と発展のため、30年に亘り力を注いでこられたローム株式会社メセナ推進室、公益財団法人ロームミュージックファンデーションの取り組みについてお話を伺った。

ア 「近江の仏像を伝える-新・琵琶湖文化館の目指すもの-」

日 時：9月9日（木）14:00～16:00

会 場：滋賀県立文化産業交流会館 第1会議室（米原市）

講 師：高梨純次（公益財団法人秀明文化財団理事、文化・経済フォーラム滋賀幹事）

意見交換テーマ「新・琵琶湖文化館基本計画について」

共 催：公益財団法人びわ湖芸術文化財団

イ 「コロナ禍のメセナ活動 ～ロームが大切にしてきた思い～」

日 時：12月17日（金）14:00～15:30

会 場：びわ湖ホール 研修室（大津市）

講 師：竹内善行（ローム株式会社メセナ推進室長、公益財団法人ロームミュージックファンデーション事務局長）

共 催：滋賀県公立文化施設協議会

■これまでの提言

2012年（平成24年）

文化ビジネスの開発で滋賀の文化と経済に新展開を

2013年（平成25年）

文化・芸術・ビジネスの見本市としての国民文化祭へ

2014年（平成26年）

滋賀の文化を発信する国民文化祭を早期に、スポーツイベントと連携した開催へ

2015年（平成27年）

自然・歴史・暮らしが統合された地「近江」の発信を

～“近江遺産” “近江八百八景” から日本遺産そして世界遺産へ～

2016年（平成28年）

新生美術館計画の実現と滋賀の魅力の発見・発信へ

2017年（平成29年）

世界遺産、無形文化遺産、世界農業遺産の登録等への取組みを

～地域の文化遺産を見直し、グローバルな評価へ～

2018年（平成30年）

地域文化を育む、新たな観光を創造する

2019年（平成31年）

地域とアートをつなぎ、新たな文化を育む

2020年（令和2年）

文化で滋賀を元気に！多様な人材を育む地域活動の推進

～アートを媒介として地域の人々を繋ぐ地域コーディネーターの育成と活躍の場の創造～

2021年（令和3年）

アートを地域のプラットフォームに 一文化と経済の連携を深める新しい視点の探究一